



# 新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳  
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

今年は1月初の官民協働企画『長谷川湍二郎展』で開け、2月の足柄アート VOL.0、12月の足柄アート VOL.1で幕を閉じるとい  
 う参加企画の多い1年だった。夏には、十和田現代美術館、青森県立美術館、岩手県立美術館、そして被災地陸前高田を見てくること  
 ができた。11月には、平塚美術館のバックヤード見学を体験した。これらはまた、アートと生活は切り離せないものであり、なくては  
 ならないものであることを実感した時間でもあった。足柄アートプロデューサー小川拓記氏は「コ・ココ・ココロ・ココロミ」という  
 キーワードで「市民参加」の在り方を残された。個の力、此処地域の力、熱い心で試みることは、今後ますます必要とされる時代だ。

## 新九郎 12月の展覧会のご案内

## 近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 11/28(水)~12/3(月) アトリエ・コネコ こどもクラス作品展	段ボールの絵を、大きな段ボ ールタワーに貼り付けたオブ ジェをお楽しみに
 12/7(金)~9(日) 悦会会展	書道研究「汎悦会」にて、坪田 宋悦先生のもと、書道を習った 仲間と「書の楽しさ」を作品に した展覧会
 12/12(水)~17(月) フォトクラブ風写真展 (全日写連小田原支部)	結成第1回目となる写真展 スナップ、風景、人物、アート、 等バラエティに富む写真
 12/21(金) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
 12/19(水)~24(月) 古澤進追悼展	今年8月惜しくも逝去された 古澤さんの追悼展。いぶし銀の ような美しい画面です。西相美 術協会会員

会期・展覧会名	会場
12/5(水)~10(月) あざみ会紫組手作り作品展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
12/12(水)~17(月) 第4回おしゃれな作品展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
12/20(木)~24(月) 真船妙子作品展 しゃべりクラフト	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
11/27(火)~12/9(日) 野田幸江展	すどう美術館 0465-36-0740
12/11(火)~23(日)LITTLE CHRISTMAS 版画展 2012	すどう美術館 0465-36-0740
11/28(水)~12/3(月) 第2回絵画フェスタ in odawara	お堀端画廊 0465-23-7819
12/19(水)~24(月) 佐藤綾子作品展	お堀端画廊 0465-23-7819
12/7(金)~12/9(日) ~円居会~陶と花の出会い	村山邸 小田原市桑原 924-1 ☎0465-37-1683
11/30(金)~12/19(水) 広川英夫小作品展	オラニエンバウム 箱根 0465-46-7217 板橋駅前
12/4(火)~9(日) 野口均ステンドグラス展	丹沢美術館 0463-83-9550
11/3(木)~12/31(月) 平賀敬モノクロームの世界	平賀敬美術館 0460-85-8327
12/22(土)~23(日) あそべるネコ展	旧三福(小田原栄町 3-12-8) http://93puku.jp/

### 小田原の街なみ再発見！ 板橋・旧東海道の街なみ 4 暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 加藤恭夫



旧道と国道が  
合流する箱根口  
のバス停の近く  
から早川に出た  
ところに小田原  
用水の取水口は  
あった。川原は  
静かで気もちの  
いい風が土手の  
木々を揺らし、  
葉が初夏の光り  
に輝いている。  
後方に通過する  
登山電車。緑の  
間から見える赤

い車両が目引く。

水門は造られた当時とは違っているが、水は今も同じよう  
に流れていく。一定の水量が保たれるように、水を川から直  
接取るのではなく水路を通して取り入れている。

取り入れられた水は高低差を利用して、最終的には山王ま  
で届いていた。今でも小田原城のお堀へと流れている。板橋  
駅に標高 27M と書いてあったのを思い出した。  
街なみもこの用水とともにできてきたのだろう。



### 標本はアートだ！

小田原城の「ウメ子」の全身骨格が見れます。

### 企画展『博物館の標本工房』

2012. 12月15日~2013. 2月14日

神奈川県立 生命の星・地球博物館

小田原市入生田 499 ☎ 0465-21-1515

<http://nh.kanagawa-museum.jp/>

### ★プレ企画 企画展製作中の展示室を公開！

11月20日(火曜)から12月9日(日曜)まで、特別展示室を公開して、  
展示づくりの現場をお見せします。展示の過程を見学できるのは、めつ  
たにない機会です。危険防止のため、入口からの見学になります。

### ★標本作りの現場を紹介します！

博物館に展示されている動物の剥製や骨格はどうやって作られる  
のでしょうか。専門の人が作るの？どれくらい時間がかかる？作り  
方は？など、その疑問にお答えします。

### ★大型標本大集合

アジアゾウの全身骨格やクジラの骨格、ボンゴやソマリノバといっ  
た大型哺乳類の本剥製など、大きな標本が大集合。なかでも、小田  
原市小田原城址公園で飼育されていたアジアゾウ「ウメ子」の全身  
骨格と、2012年1月に小田原市国府津の海岸へ漂着したザトウク  
ジラの骨格は必見です！

### ★スペシャルゲスト 北陸からクジラがやってくる

富山市科学博物館の協力のもと、オウギハクジラの全身骨格が当  
館へやってきます。この骨格の一番の特徴は、「簡単に組み立てら  
れる」ことです。全長が5メートルもあるクジラをどうやって組み立  
てるのでしょうか？ 展示期間中に講座を2回開催して、参加者に組み  
立ててもらいます。完成した骨格は、展示室にそのまま展示します。

## 「はじまりの記憶 杉本博司」が終わって

第6回小田原映画祭のクロージング上映に「はじまりの記憶 杉本博司」が上映された。本映画の上映は、市長よりの要請で実現したものだ。すでにご案内の通り杉本博司氏は、小田原の江之浦を自身の活動の終の棲家とし、この地に芸術文化施設を建てることになっている。完成は2015年の予定だ。市長は、この世界的に著名な現代アーティストを上映を通して地元の方に知って頂く機会にしたいと考えていた。

私は3月に渋谷のシアター・イメージフォーラムで一度見ていた。映画のラストシーンの江之浦の海を見て、小田原映画祭のプログラムとしては是非上映したいと思っていたので、市長からの要請は願ったり叶ったりであった。

杉本博司氏の作品は近年少しずつ見てきた。今年5月に原美術館で「杉本博司 ハダカから被服へ」が開催された。映画祭上映も決まり見ずにはいられない。内容はタイトルの通り、人類がまだ被服を持たない原人の写真から始まり、壮大な人類のファッションの歴史を写真で表現したものである。合わせて展示されていた氏の美術品コレクションが面白かった。ジャック・ゴティエ・ダゴティ「筋肉解剖学完全版」は3枚に切り開かれた女性の背中の赤い筋肉が、妖しい美をみせていた。また小田原文化財団の理事である野村萬齊氏のために手掛けたという衣装には、放電の図柄が使われ斬新な感覚に目を惹かれた。

2009年、金沢21世紀美術館で「歴史の歴史」を見た。その時は「杉本博司は凄いアーティストだ」という程度の認識しかなく、作品を見るのも初めてだった。あれはヘンリー8世の肖像写真(蝸人形)であったのだろうか。非常に大きいサイズで、王侯貴族の威厳に満ちた写真であった。写真ではあるがいわゆる普通の写真とは違うように感じ、今でも威厳のある強い存在感が強く記憶に残っている。

直島ではベネッセミュージアムで「海景」シリーズを数点見た。これはサイズが小さく、杉本作品であると確認したのみで、じっくり鑑賞しなかったことが悔やまれる。映画に登場する護王神社も訪れた。神社の前に轆かれた玉石が見るものを厳粛な気持ちにさせた。本殿の地下にある石室には、山腹側から掘られた細くて長い隧道を通して。神の降臨する盤座と地下の石室には何らかの関連があるに違いないと考え、黄泉の国に繋がる空間(石室)と太陽神へと繋がる天上の神殿を結ぶ光学ガラスの階段を据えた。地下と地上は光学ガラスの階段を通じ光だけが結ぶことができる。同じ道を元に戻ると眼前に海が見えた。長方形の真っ暗な出口の先に見えた瀬戸内海が、本映画のあのインパクトある美しいポスターに使われていた光景であったことを、映画を見て初めて気づいた。そこまで計算しつくされていたことに、改めて敬服した。

IZU PHOTO MUZEUMの開館展では杉本博司一光の自然じねんを見た。MUZEUMの前庭も杉本氏の設計になるものであった。展示内容は写真術のパイオニアの一人ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットへのオマージュともいべき写真からなる。タルボットの170年前の紙ネガから杉本氏が写真に起こした。「家の住み込み家庭教師」が素晴らしかった。右上から差し込む柔らかな光が家庭教師をシルエットに浮かび上がらせる。その女性の姿と静かな表情が美しかった。杉本氏により消えゆくこの貴重な写真は救われたのだ。また「放電場」シリーズは本映画でもその撮影の様子が紹介されていたが、40万ボルトの電流で人工的におこした雷の痕跡は、まるで生き物のようで、光の瞬間の美しさが際立っていた。「放電場」の展示室には、3m程の高さの丸太の柱の上に「雷神」が置かれていて、カッと見開いた眼でこちらを見下ろしていたのが強く印象に残っている。

ギャラリーコヤナギは杉本博司氏のパートナーの経営になると知り、興味を持ち出かけた。ギャラリーでは「放電場」のシリーズが展示されていて、外国人で一杯であった。カウンターにDVDが流れており、杉本氏のニューヨークのスタジオでの仕事を紹介していた。海景の大画面を杉本氏の指示により、アシスタントが一点のキズも無いように筆で入念な仕上げをしていた。仕上げられた完璧な画面から、あの圧倒的な強い画面が立ち現われるのだ。その画面に長く見入る。海はなんと深く広いのであろう。太古から続く海への想像は悠久の時間を感じさせる。またその画面に人は様々な想いを馳せるのであろう。

今回の上映をきっかけに、改めて人間杉本博司氏を知ることになった。映画、著作を通じ古今東西の文化・歴史に対する造詣の深さ、思考の深さ、日本人としての誇りを知り、その作品の含む意味は計り知れない大きな世界を表していることを教えられた。杉本博司氏の芸術活動の集大成となる文化施設が江之浦にできることは、小田原にとってかけがえのない素晴らしい財産となるであろう。

「小田原から世界に日本文化の良さを発信していきたい」という熱い思いが語られた。市より「ふるさと大使」を委嘱され、今後小田原市のPRにも務めていただける。トークショー後のレセプションでは、気軽に我々と歓談された。本物の人の持つ自然体の魅力に、参加者は皆魅了されてしまった。

木下泰徳



十一月(11月)

※十一月はASHIGARAアートフェスティバルで明け暮れた。

「一人一人が主役となって、この地域で、ばかばかしいことを本気でやってみる」これは、このアートフェスティバルのプロデューサー小川拓記氏が、「市民創発プログラム」の本質を表現された言葉だ。今年8月、不慮の事故によりお亡くなりになったことを知り、このプロジェクトが実現できるのかと不安になった。そんな時、小川さんの仲間であり作家でもある歳森勲氏の小川さんを悼む言葉をブログで読み、小川さんのためにも何とか形にしようという準備してきた。

「ことばのキズナ」は、現代なら1分で済んでしまう言葉の伝言を、人力のみを使ってつなぐワークショップである。秋のひと時、足柄の自然を楽しみながらサイクリングコースをみんなまで走ったり、歩いたり、糸電話を使って言葉をつなぐ。ワークショップの証として、映像と平面作品を残すことにした。

いざ動き始めると、人集めや実現を阻む多くの壁にぶつかり悪戦苦闘した。十一月はどの地域もイベントが多く、学校公開日も重なって、人集めには特に苦労した。ワークショップ自体アートと呼べるのか迷いも生まれた。そんな中、メールで案内した方から「面白そうだから参加したい、糸電話は小学生以来で楽しみにしています。」と返信があった。このイベントの趣旨を理解していただいたことが本場にうれしかった。雨天順延による参加予定者のキャンセルも痛かった。当初地域を巻き込むイベントを目指したが、道路使用等での推進室との折衝にも時間がかかり、準備期間の短さと、「思いを形にすること」の難しさを痛感した。

しかしアートフェスティバルとは、与えられるものではなく「人が動いてアートのする」という当初の目標を参加者が共有できたことは、何よりの収穫であった。この記録を、映像にまとめられる映画学校の学生の作品が、何かを語ってくれるであろうか、十二月二日足柄アート最終日の上映会を楽しみにしたい。上映はブルックス本社本部会場、※横井山泰の作品を見ることのできるカフェが十二月一日大井町にオープンとなるCafé&art café sympha - 38 - サンパとはフランス語で、「気軽な」という意味。フランスで家庭料理を学んだシェフの気軽なランチ・ディナーも楽しめる。場所は大井町金子303、ヤオマサの奥隣りになる。



になる。